

【書評】『インターネットの次に来るもの 未来を決める12の法則』

著者	橋本 大也
雑誌名	DHJJOURNAL2016
ページ	52-52
URL	http://doi.org/10.34482/00000032



【書評】『〈インターネット〉の次に来るもの — 未来を決める12の法則』

THE INEVITABLE – UNDERSTANDING THE 12 TECHNOLOGICAL FORCES THAT WILL SHAPE OUR FUTURE

橋本 大也

Daiya Hashimoto

デジタルハリウッド大学 教授
メディアライブラリー 館長

発売直後に米国、中国、そして日本でベストセラーとなった話題作。著者は『WIRED』の創刊編集長で、未来を見通す世界的ビジョナリーとして知られるケヴィン・ケリー。ベストセラーとなった前著では、テクノロジーの概念のカバー範囲を政治や経済、社会や文化にまで拡張した『テクニウム』（みすず書房）というコンセプトに結晶させた。そして技術が人間の意志を離れて、自立的に進化していくダイナミックな未来イメージと、その流れの根底にある普遍的な著者のユニークな哲学が鮮やかに語られた。

本作はその先を往く。この先の30年でテクニウムが変えていく世界をよりリアルに描き出す。著者はまず未来を見るためのツールとして、テクノロジーの進化を促している12のドライビングフォースを定義する。テクノロジー宇宙を支配する12の物理法則といつていい。

12の法則とは、Becoming、Cognifying、Flowing、Screening、Accessing、Sharing、Filtering、Remixing、Interacting、Tracking、Questioning、Beginning。12章で語られるこれらの法則に従って計算をすれば「不可避な」（原題：The Inevitable）未来が見えてくる。今あるどの企業が、どのサービスが市場の勝利者になるかは予測できないが、どんな性質の企業やサービスがイノベーションを起こすかは正確に予想できると著者は語る。

Protopiaという造語が印象的だ。ユートピアでもディストピアでもなくプロトタイプングの連続としての未来を指している。未来は遠くにあるのではなく、もう来ているというのだ。そしてケヴィン・ケリーは、2016年の今こそスタートアップに最高のタイミングだと書いている。彼は読者に呼びかける。まだあらゆる基本的サービスが存在せず、ドメインも取り放題だった30年前のインターネットを想像してみよう。なんでもできる気がするだろう。そして賢明な状況認識ができるならば、今が再び同じチャンスの状況なのだ、早く気づけと読者に訴えている。

1995年、インターネット草創期に『ビーイング・デジタルビットの時代』（ニコラス・ネグロポンテ著、アスキー）という伝説的な名著が世に出た。約30年後を予想する本だった。今読み返すとその予言の多くは当たっていると感じる。IT業界で、この本がきっかけで人生が変わった、この本がなければ今の仕事はしていないだろう、という人たちに私は大勢会ってきた。そして2016年『〈インターネット〉の次に来るもの』が出た。これは『ビーイング・デジタル』のように30年に1冊の名著になる予感がする。



『〈インターネット〉の次に来るもの—未来を決める12の法則』
ケヴィン・ケリー 著 服部桂 訳
発行：NHK出版